

被災3県〔宮城、岩手、福島〕の“声”を聴き取るそれぞれの取り組みを通して、被災地域、被災学校・教師・子ども・親に起こり、いまも起こっていることがら、その声をどう受け止めるかを報告しました。



(1) 第1回研究メンバー全体会合： 2012年3月17日(土)11:45~13:10に、日本教育学会・特別課題研究「大震災と教育」(教育学会ホームページ [<http://www.jera.jp/>] に掲載) の第1回研究メンバー全体会合が27人の参加で開かれました。会合では、13人で出掛けた福島県現地訪問・調査や、9つのサブグループの「これまでとこれから」、科研究費・基盤研究申請と今後の研究の進め方などの点が報告・議論されました。半年間の経過・成果や課題・問題点についての有意義な交流と、新しい年度の研究方向に関する「見通し」の確認が行われました。

(2) 第1回シンポジウムに70人の参加者： 同日の14:00~17:30に課題研究主催の公開シンポジウム(下の□内を参照)が開かれました(於：明治大学)。70人ほどの参加者でした。

その冒頭で課題研究代表・藤田英典さんは、右の□のような「開会挨拶」をして、本課題研究の意味と課題・展望について紹介しました。

司会・藤田和也さんがシンポジウムのテーマと報告者を紹介し、それに続いて、「学校教育グループ」の上田さん、「学習・学校支援グループ」の清水さん、「原発事故被災と子ども・学校・地域グループ」の境野さんの3人が、

第1回公開シンポジウム

大震災と教育：被災3県からの“声”が、日本の教育に提起するもの

【報告】

- 1、宮城県の教師・学校・地域の声から考えること
上田孝俊さん(武庫川女子大学)
- 2、岩手県・陸前高田での支援・調査を通して
清水睦美さん(東京理科大学)
- 3、原発・放射線災害と子ども・学校・地域
境野健児さん(福島大学)

<司会・進行> 藤田和也(國學院大學)

「シンポジウム開会の挨拶」

特別課題研究「大震災と教育」代表：藤田英典(日本教育学会・会長、共栄大学教授)

本日のシンポジウムは、昨年9月からスタートした日本教育学会の特別課題研究プロジェクト「大震災と教育」の第1回の公開シンポジウムです。その研究プロジェクトについて簡単に紹介し、開会の挨拶とさせていただきます。

ちょうど一年前、「3・11」として記憶されるであろう東日本大震災と東電福島第一原発事故が起きました。言葉ではとても言い尽くすことのできない幾多の悲哀と困難をもたらし、そして一年たった今も、その山積する複合的な困難や課題に満ちた厳しい状況が続いています。そうした困難と厳しさのなかで、それでも、多くの人びとが、いたわり合い支え合いながら、勇気と希望を持って復旧・復興に向けた新たな歩みを始めていること、悲哀や無念を内に秘めながらも笑顔を取り戻し、明るく振る舞っていることは、私たちにも勇気と希望を与えてくれます。

本研究プロジェクトは、この近代史上最大と言っていいであろう大震災・原発事故の経験と復旧・復興に向けた歩みについて、特に子どもと教育に焦点を当て、被災地の人びとの思いも含めて丁寧に聴き取り、種々の資料収集も含めて多角的に調査して、可能な限り正確かつ総合的に記録することを第一の課題としています。

もう一方で、その調査結果を踏まえつつ、「3・11」の出来事及びその後の避難生活や復旧・復興に向けた各界各層の種々の対応を含む諸経験と、そこで提起されたさまざまな問題や課題について、多角的かつ総合的に分析・検討することを第二の課題としています。

その二つの課題を遂行するために、被災地別の現地調査班と、もう一方で、学校教育、社会教育、教育行政、原発事故、防災教育、心身のケアなどの領域別に4グループ、10サブテーマ・グループと総括班を編成し、それに加えて、領域別のサブテーマとも重なるテーマですが、地域社会における学校の意義と役割、家族やコミュニティーと絆・繋がり、ボランティア活動と市民社会など10の理論的テーマを設定し、さまざまな角度から多面的・総合的に追究することにしています。

本日お集まりいただいたみなさまもそれぞれに関心を持ち、また支援活動や調査研究に取り組んでおられる方も多いと思いますが、さまざまなかたちで連携・交流しながら、被災地の復旧・復興が可及的速やかに進むことを願いつつ、これからの調査研究を進めていきたいと思っていますので、今後とも宜しくお願い致します。

3つの報告の要点及びその課題性と意味については、下の□に見る藤田和也さんの「シンポジウムを司会して」にまとめられています。「さすが教育学会」というアンケート記入もあった充実した3報告でした。報告者のうちのお二人にスペースの許す範囲の短い「報告を終えて（報告して）」を、右に寄稿いただきました。

「シンポジウムを司会して」 藤田和也(國學院大學教授)

お三人の報告はそれぞれに重くて充実した内容が盛り込まれていて、配分された時間内に収めていただくために細部をかなり割愛しながら報告していただくことになり、報告者と聴衆のどちらにも大変申し訳ない思いを強めたシンポジウムであった。

武庫川女子大学の上田孝俊さんは、3・11の震災後、臨床教育学会で宮城県の被災地を訪問し、被災学校の先生方からの聴き取りを通して得た知見と考えさせられたことを整理して報告された。たとえば惨事を思い起こさせる「リマインダー」の問題が、被災を対象化しそれを乗り越えていくために必要な内面作業であると同時に、被災によるPTSDを呼び起こしかねない場合もあってその扱いは慎重でなければならないという指摘、被災時における学校と教師の存在と役割(安全と安心、共に生き歩む存在と役割)を再考する必要性を提起されたことが示唆深い。

東京理科大学の清水睦美さんは、震災後いち早く岩手県陸前高田市に学校への教育活動支援と子どもたちの学習支援のボランティア活動に従事されてきている経験に基づいて、被災学校の再開のプロセスを段階的にたどりながら、それぞれの段階で学校が直面する困難や課題を支援する立場からとらえて整理された。中でも、再開された学校において生徒との向きあい方をめぐるいくつかの葛藤(身内や友を亡くした子どもたちの「沈黙」をどう受け止めるのか、「普通の生活を」という日常への回帰のもつ意味の2面性[=何かを忘れようとする作用と、ここで生きていくという決意・宣言]、など)についての指摘があり、被災地・被災者への支援や調査の意味(被災者にとっての意味・印象・引き起こす感情など)を慎重に問うことの大事さについての指摘は、とても深く重い。

福島大学の境野健児さんは、震災以前から福島県内の地域に入り、その村づくりや教育条件整備に研究者として相談・援助に携わり、震災後も原発事故の被災地に入って聴き取りや相談支援に取り組んでいる立場から、被災・避難による子ども・学校・地域の現況と希望への回路を探るべく、多角度からとらえた課題を提示された。避難生活と仮校地・校舎での学校生活であるために発達環境・学習環境が劣悪化し、家族関係・友達関係の切断、家庭の生活条件の不全、コミュニティーの喪失、放射能・地震への不安、将来の見通しのなさ等々、じつにさまざまな困難が提示されると共に、原発災害のもとの子どもと教育に関する現実的で焦眉の課題がいくつも提示された。いずれも私たち研究プロジェクトに突きつけられた重い課題ばかりである。

「報告を終えて」 清水睦美(東京理科大学准教授)

大震災の発生から一年。参加しているNPO団体の一員として、昨年4月から三十数回、被災地に足を運び、被災学校に物を届け、被災した子どもたちと関係ももってきた。団体として、また団体の中の一人として、何をするのか/しないのかを考えて実践に加わってきたが、一方で、社会的立場を得ている「研究者」として、何を考え何を発信するのが問われていることもわかってはいた。しかし、東北に足を運びながら、被害の甚大さ、時代の状況、そして政治の動きの重なり合いのなかで、研究者として立つ位置を決めるのに、想像していた以上に時間がかかったように思う。

今回のシンポジウムのテーマは、「被災3県からの“声”が、日本の教育に提起するもの」だから、「研究者」として、被災の「声」を、どのように拾い上げようとしているのかと問われていたように思うし、そのような角度から一年間積み上げてきた記録を読み返す機会となった。今回の報告を通して、研究者として拾い上げる「声の主」を見きだめることができたように思うし、それによって、研究者としての立ち位置が決まり、また一歩先に研究を進められるように思う。

「福島から報告して」 境野 健児(福島大学教授)

線量が低くなる兆しもなく、深くため息をつく人もいれば、考えるだけで気が減ってしまうので気にしないと、被ばくの中での暮らしは重い。原発災害がなければ目に見えない、匂いもない放射線をこんなにまで気にすることはなかった。原発災害は、生活を一変させ、子育ても学校も変えてしまった。学校は汚染され、防護服を着用しないと入れない空き家になったままだ。放射性物質を避けることが生活の中心におかれ、子どもも友だちを失い、教師も多くの教え子と別れることになった。こんな悲惨なことが一気に襲いかかったのである。

でも、県内に残った子どもの学びと可能な限りの安全(除染・防護)のある学校空間が保障され、また自治体では避難しながら学校を移設していることなど、学びと学校を大切にしている姿に感動した。何故なのだろうかと思いつつ、報告させて頂いた。特に、この震災のなかで、子どもが遭遇した悲惨な状況の中から当たり前の大切さ(日常性が持つ価値)、人とひとの関係、あるいは追われて行くなかで生まれ育った地域への思いなどに教えられた。こうした子どもの力になるような教育、希望を力にする教育学が求められているのだと。放射性物質は関東地方にまで飛散し、原発は全国で54基ある。しかも中国にも韓国にもある。福島を原発災害による孤島にしてはならない。

私は「生活の日常性と安心をどう考えるか」と「学校・教師が、子ども・親にとって持つ位置・意味」に関して、やや対立する論点が3報告と質疑で提起されていたという印象を持ちました。(以上、事務局ニュースNo.1担当 久富善之)